

伝わる

第三十三代真覚門主伝灯奉告法要

本山佛光寺

慶讃法会基本理念

「大悲に生きる人とあう 願いに生きる人となる」

2023年(令和5年)、本山佛光寺は、慶讃法会として宗祖親鸞聖人御誕生850年、立教開宗800年、聖徳太子1400回忌に併せ、第33代真覚門主伝灯奉告法要をお勤めします。

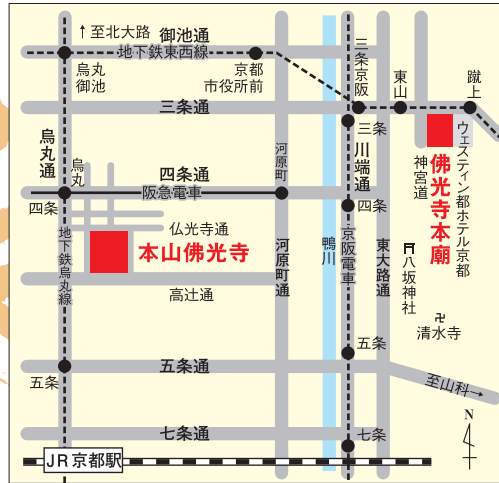
私たちの生活は、人工知能(AI)をはじめとするテクノロジーの発展により、想像もつかないほど便利になりました。

ところが、相変わらず心の平安は得られず、生きている意味を見失い、生かされている事実を忘れ、傷つけあっていることさえも気づかず、互いに孤立を深めています。

世の中が移り変わり、どのような境遇にあっても、阿弥陀さまの大悲のお心に生きられた親鸞さま。そのおすがたに流れるお心を、自らの願いとして生き抜かれたのが私たちの先人であり、今の私に届いている南無阿弥陀仏の歴史であります。

それは、思いを超えたはかり知れない命との出遇いであり、その命の願いに生きることが、苦悩の中を生きる力となるのです。

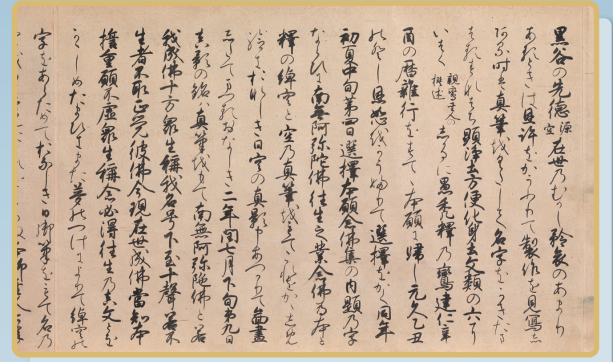
時と処を超えて、人から人へと伝わるともしびを、「大悲に生きる人とあう 願いに生きる人となる」と掲げ、このたびの法要をご縁に歩んでまいりましょう。



本山佛光寺

〒600-8084 京都市下京区新開町 397
Tel.075-341-3321 / Fax.075-341-3120

<http://www.bukkoji.or.jp/>



佛光寺本「善信聖人親鸞伝絵」

このたび、慶讃法会のひとつとして「伝灯奉告法要」がお勤めされます。宗祖親鸞聖人から数えて、三十三代目となる真覚さまがご門主になられたことを慶ぶとともに、親鸞聖人以来、先人方を通して伝わったお念仏の教えが、これからも末長く伝わり続けることを願い、おつとめされます。

「よしっ、今日から私はお念仏を称えようー!」。このように決意して、お念仏を称え始めたひとはおられるでしょうか。自分がお念仏を称えるようになったきっかけを、明確に覚えているひとはほとんどおられないでしょう。では、いつからいつのようこ?

歩まれる背中から

私たちより先に、お念仏の教えに出遇われたひとがいました。その先人方は、悲しみ苦しみ多き人生を、お念仏とともに歩まれ、教えに出遇えた喜びを、歩まれる背中に見せてくれました。今、私が称える「南無阿弥陀仏」は、その量り知れない先人に称えられてきたお念仏の声を、聞くところから始まったのです。

いんげん、いんげん、いんげん

昨年、あるご門徒のおばあさんが亡くなりました。幼少期にご両親を亡くし、大変苦労された方でした。お寺の近所に住んでいたおばあさん。門前を通る時は必ずお堂の阿弥陀さまに合掌し、しばし立ち止まる姿をよく見かけました。おばあさんのお家のお内仏。前の畳が擦り切れ、少しへこんでいます。おばあさんが長年お給仕をし、静かに座り続けられたあとでした。

「いんげん、いんげん、いんげん」の音が口をせだしたおばあさん。ご苦労の中、周りに迷惑をかけてしか生きることができない身

を、仏さまに照らされ、支えられ続けながら、「こんぐらいの苦労、たいしたことじゃない」と、懸命に生きてきた。おばあさん晩年の願いは、同居する高校生のお孫さんと共に、お寺の法座へお参りすること。しかし、その願いが叶えられることはありませんでした。

枕経の席へ伺うと、私が初めて会うお孫さんもおられました。読経を始めようと合掌すると、背中から多くのお念仏の声に交じり、「ナマングブ、ナマングブ……」。静かに称えるお孫さんの声が確かに聞こえます。驚きました。一度も月参りの場にお参りすることのなかったお孫さんでした。

「南無阿弥陀仏」に出遇って欲しいというおばあさんの願いは、その背中からすでにお孫さんへと伝わっていたのです。その生きられた苦しみや悲しみ、そして喜びのすべてが、お孫さんのお念仏の声を通して、私にまで届きました。「こんぐらい、こんぐらい」と微笑むおばあさんの面影とともに。

次は私たち

今、私にまで届いたお念仏の伝灯。それは、お釈迦様から約二五〇〇年。お念仏を伝えてくれた、量り知れない先人の歴史でもあるのです。お念仏の教えを人生の灯として歩まれたその歴史を、これから私たちがどのようにいただき、そして、次の世代へと伝えていくことができるのか。

次は私たちの番です。